2016.6.3 読売新聞
（第3種郵便物認可）

信頼できる情報を発信

「今はがんの情報があふれており、後悔せずに治療を受けるには、情報の選び方が大切」。がん情報サイト「大阪がんえええナビ」を運営する「制作委員会」理事長の濱本満紀（はまもとまき）さん（57）は、2011年3月にインターネットのウェブサイトを始めた理由をこう語る。

自身が所属する「がんと共に生きる会」など四つの患者団体が活動の中心。サイトでは、治療法のほかに予防、検診、療養生活、就労支援など、患者家族や市民の参考になる情報を提供する。「手早く」「簡潔に」検索できるのが特徴だ。

力を入れるのが「大阪がん診療スピード検索」。国、府指定の63のがん拠点病院（14年度）について、どのがんでどういう治療ができるのかを、専門の医療スタッフ数や件数などの実績とともに紹介している。相談支援の体制や緩和ケアの特色なども一目で分かる。

濱本さんは「病院間の比較もできるが、数値の大小のみに左右されず、治療法を決定する際、医療者とのコミュニケーションを円滑にする手段の一つとして活用してほしい」と語る。

大阪府は1962年にがん登録を開始。がんの発生数や治療成績などを、がん対策に役立てている。分析を担う府立成人病センターの公表データを、ええナビも活用している。がん疫学の専門家として、同センター在籍時から助言する医師の井岡亜希子さんは、「公開情報を患者目線で発信する活動は全国でもほかに例がない」と評価する。

濱本さんは14年前、母を大腸がんで亡くした。母は内緒で通院しており、濱本さんが気付いた時は、最も進行したステージ4。医師は母に詳しい説明をせず、積極的な治療もしていなかった。

「副作用を抑えて日常生活を送れるなら、治療を受けてほしい」。濱本さんは母に病名を知らせ、自ら探した東京都内の病院で、抗がん剤治療を受けるよう説得した。治療を始めると、肺に転移したがんが消え、肝臓のがんまで縮小した。

「健康な人だと勘違いするくらいの回復ぶりだった」

しかし、自宅の階段から転落して骨折。治療が中断し、がんは再び勢いを増した。2年半に及んだ闘病生活は終わりを告げた。濱本さんは「私も怪しげな民間療法の本を買ったことがある。患者の家族ならば一度はそういう気持ちになる。だからこそ信頼できる情報が必要」と強調する。

「医療者と患者をつなぐサイトを目指す」。母との最後の2年半が、濱本さんの原動力になっている。

「大阪がんえええナビ」についてメンバーと話し合う濱本さん（左）＝大阪市の事務所で

＜メモ＞
◇大阪がんえええナビ　http://www.osaka-anavi.jp
◇大阪府立成人病センターがん予防情報センター　http://www.mc.pref.osaka.jp/ocr
統計情報の解説が詳しい。

記事コピーサービス（有料）の申し込みは読者センター（☎03・3246・2323）へ